

朝鮮語教育における二、三の問題について

宣 憲 洋

1. はじめに

外国語教育において学習者に安心感を与えること、言い換えれば学習者の緊張を解きリラックスさせることの重要性は既に多くの外国語教師や外国語教授法の研究者によって指摘されている。

例えばアール・W・ステービックは「安心感→積極的参加→集中力」と定式化し、次のように記している。

「長い目で見れば、学習量は集中する注意の質と深い関わりがあります。そしてその注意の質は、学習者が授業にどの程度積極的に参加するかによって決まります。彼らが学習に集中するのは、それによって安心感が得られる範囲内に限られています。この意味で学習者はカメにたとえることができます。カメは首を出す気になっている時のみ、自力で前進するのです。」¹⁾

2. 朝鮮語教育に特有の問題

日本における朝鮮語教育には英・仏・独語等の外国語教育とは異なる特殊な問題がある。

第一に朝鮮乃至朝鮮語という語に含まれるマイナスイメージがある。

平成10年度の授業開始に当たってクラスを良く知るため履修学生に簡単な自己紹介をメモ書きしてもらったところ、ある学生は「朝鮮語第一希望の変わり者ですが、よろしく」と書いた。

他の外国語が第一希望であればこのようなコメントを書くとはとても思えない。

しかし、朝鮮語履修が第一希望の学生が書いたコメントと知ったら、おそらく誰もこれを見て不思議には思わないであろう。

今のところ日本で朝鮮語を学ぼうとする者は在日韓国・朝鮮人を別にすれば余程の変わり者ということになる。

明示的な偏見ではないが、おそらく大多数の日本語話者の心の奥底に潜んでいると考えられる韓国・朝鮮、朝鮮語に貼りついているこのような負のイメージ（反価値）を取り除く努力が必要である。

これは言うまでもなく日本による朝鮮の植民地支配以来、現在なお続いている在日韓国・朝鮮人に対する民族差別や偏見に起因するものである。

元従軍慰安婦に対する補償問題、定住韓国・朝鮮人に対する指紋押捺強制の問題、民族学校に通う女学生に対する制服切り裂き事件、首都圏や京阪神地区に多い在日韓国・朝鮮人に対する賃貸住宅や貸間入居拒否等、制度的差別や偏見に起因する差別の具体的な例は枚挙にいとまがない。

このような差別を一つひとつなくして行く努力と、両国の人々の交流の積み重ね、互いに相手を知ろうとする努力の積み重ねによって、いつの日か日本語の中の朝鮮・朝鮮語に貼りついた負のイメージを拭い去らなければならない。

朝鮮語教育では民族・文化・言語には、違いはあっても優劣はないという認識を学生に持たせることが重要であると思う。

目的言語にマイナスイメージを抱いたまま学習が進展するとは考えられないからである。

2002年ワールドカップ共同開催、韓国における日本文化開放、1997年度に修学旅行で韓国を訪れた全国の中学、高校が245校もあり、道内からも高校8校が韓国を訪れたとの報道。

これらのことから明るい未来を夢見ることが可能になってきた。

平成10年度小樽商科大学入学者の朝鮮語履修登録者17名に対するアンケート調査の結果、その志望順別内訳は、第一希望12名(70.6%)、第二希望3名、第三希望1名、不明(回答なし)1名であった。

これは筆者にとって意外であると同時に望外の喜びでもあった。

なお、履修の動機・目的についての設問(記入式)に対する答えは、次のようであった。

興味があったから……………	4	楽しそうだから……………	1
韓国に友人がいるから……………	2	隣国のことばだから……………	1
隣国についてもっと学びたかったから……………	2	朝鮮の歴史に興味があるから……………	1
日常会話習得……………	2	韓国に永住したいから……………	1
W杯共催等交流が活発化しそうだから……………	1	不明(回答なし)……………	2

3. 文字に関する問題(ハングル提示の時期と方法)

第二に文字の問題がある。朝鮮語の表記に使われる文字ハングル²⁾は科学的に創製された素晴らしい文字であるが日本ではあまりなじみがない。

おそらく朝鮮語を選択した学生のほとんどが朝鮮語の授業で生まれて初めてハングルの注意深く見ることになるのが現実であろう。

もちろんテレビ画面や報道写真、雑誌の風景写真等の中で目にしたこと位はあるに違いないが、その印象は、なにか不思議な記号のようなものがあつた位にしか記憶に残らない程度のものらしい。

ハングルのいつ、どの段階で提示するかは重要な問題であり得る。

全く馴染みのない文字を提示することは学習者の強い好奇心を喚起し、学習意欲を奮い立たせることも予測されないではないが、未知の文字に対する緊張をももたらすであろうことは容易に想像されよう。

どうすればこのような緊張なしにハングルの導入できるであろうか。

現在市中に流布している朝鮮語入門書や教科書では最初にハングルの文字表を掲載し、次いで個々の字母や綴りにカナやローマ字(音声記号)を振り、説明を加えているが、この方法には問題がある。

カナでは韓国語の表記は不完全にならざるを得ない。またローマ字併記もハングルと対比しながら見るのでは煩雑であり、学習者の負担や緊張を取り除くよりは却って増す結果になってしまうものと思われる。

そこで筆者は来年度の朝鮮語の授業ではハングルと1対1で対応するローマ字(「国語のローマ字表記法」, 韓国文教部告示第84-1号, 1984. 準拠)を用いて入門期用テキストを作成し、初めの3回はこれを使用して授業を進めようと考えている。

なお、子音字の提示に当たっては必ず字母の名称を教える。(読者は何故そんな当たり前のこと

をわざわざ言うのかと不思議に思われようが、筆者は「NHK ラジオ・ハングル講座」を聞いていて講師が「1 (エル) 語幹」と説明するのを聞き驚いた記憶がある。

子音字の名称は例えばㅍ (p) は [piip] のように当該子音の音節初の音価と音節末の音価を二つの母音でつないだものでできているので朝鮮語の発音の特徴を覚えるのに非常に適している。また、例えば「p[piip] 変則活用」のように文法用語としても用いられる。

こうすることで学習者に余分な緊張や負担を与えず韓国語そのものの学習により多くの時間と集中力が向けられるものと信ずる。

学習者が韓国語の発音や表現をある程度覚えた段階（4 回目の授業から）で初めてハングルを提示するが、提示順は「訓民正音」³⁾の順にはよらず先ず基本母音字を提示する。

(1) 아[a], 야[ja], 어[ɔ], 여[jɔ], 오[o], 요[jo], 우[u], 유[ju], 으[i], 이[i]

次いで子音字を調音点ごとに次のようなグループを作り、数個の子音を一まとめにしてグループ順に提示する。

(1) ㅋ[k/g], ㆁ[ŋ], ㆁ[kʰ], (ㅇ[ŋ])⁴⁾

(2) ㄴ[n], ㄷ[t/d], ㄸ[tʰ], ㅌ[tʰ] ㄹ (音節初では [r], 音節末では [l])

(3) ㅅ[s], ㅆ[sʰ], ㅈ[tʃ/dʒ], ㅉ[tʃʰ], ㅊ[tʃʰ]

(4) ㅁ[m], ㅂ[p/b], ㅃ[pʰ], ㅍ[pʰ]

(5) ㅇ (音節初では音価ゼロ, 音節末では [ŋ]), ㅎ[h]

このように提示することで学習者がハングルを容易に習得できるだけでなく制字原理の理解の助けにもなることが期待できる。

文も9 回目の授業までは崔鉉培先生が（1）人間の目は二つ横に並んでいるので視線が横に移動する方が読みやすい。（2）机の上で書く場合も手は縦よりも横の動きの方がスムーズである。（3）印刷に便利。等 10 の理由あげて考案された가로글씨⁵⁾(karo kılssi)を使った가로쓰기(karo ssiki=横書き)の方法を借り次の例のように書く。

ㄴ ㅌ ㄹ ㄴ ㄹ ㅎ ㅌ ㅍ ㅅ ㅈ ㅇ ㅌ ㅌ. (nanin hak' saingita. 正書法による表記: 나는 학생이다.)

10 回目の授業からは音節単位の綴り、つまり普通のハングルの読み書きに入るが、これまでの長い準備期間の効果で学習者もハングルの仕組みを十分に理解し何の抵抗もなくハングルの世界に入り込めるものと確信する。

4. 文法用語 “해형”⁶⁾ (hɛ-hyɔŋ) の提案

10 回目の授業で “해형” を導入する。

ここに言う “해형” とは今まで論者により「完了接続形」⁷⁾、「連用 -아(-a), -어(-ɔ), -여(-jo)」⁸⁾、「連用形」⁹⁾、「第三活用形」¹⁰⁾、「第一副詞形」¹¹⁾ と実に多様に命名されてきた朝鮮語用言の一活用形のことである。

今、新たな名称を付け加えるのは、いたずらに説明を煩雑にしようというのではなく、むしろこの “해형” という文法用語を使用する事により過去形・命令形等を統一的に、また理解しやすく説明するためである。

従来の教科書ではこの形の提出順序はかなり遅く、ほぼ教科書全体の二分の一乃至三分二程度進んだ段階になって初めて現れる。しかも独立して現れるのではなく過去形やその他 “해형” を使った表現の説明の中で現れるだけである。

そのため現在の会話文で最も頻度の高い “해요체 (hɛjotʰe)” や過去形がかなり授業の進んだ

段階でなければ使えない。

また従来過去形については「語幹+『過去表示形態素-았, -었, -였』+語尾」という説明がなされていた。因みに韓国ソウル大学語学研究所編の『KOREAN 1』では、V/A+past tense marker+ending elementとして過去形の組み立てを説明している。¹²⁾つまり。仮に動詞보다 (pota) を例として挙げるなら語幹‘보’ (po) に tense marker ‘-았’(-ass-) をつけ、語尾-습나다 (-sibnida) をつけると説明されている。しかし、この説明では命令形や해요체, -해지다 (hɛtʃita), -해버리다 (hɛporita) 等を説明する際いちいち語幹の母音が異なる毎に異形態について説明をしなければならず煩雑この上ない。

また、‘過去表示形態素-았-, -었-, -였-’は、多くの学者の一致して認めるところであり、歴史的には正しいと言えようが、現代韓国語に関する限り、むしろ‘-ㅁ-’とすべきであると思われる。

“해형”なる文法用語を採用し、この形を十分習熟させた上で、過去形は、この해형に‘過去表示形態素-ㅁ-’をつけ更に語尾等をつけると説明すれば学習者にも分かりやすく教える者の労力もかなり軽減されるものと思われる。

命令形も해형に命令形語尾‘-라 (ra)’をつけると説明するだけで済む。

註

1. Earl W. Stevick, 梅田 巖・石井丈夫・方丈和明共訳, 『外国語の教え方』, サイマル出版会, 1986, 7ページ。
2. ハングルとは朝鮮語を表記する文字の名称であり, 朝鮮語を意味しない。
「昼間コース朝鮮語」(『外国語への招待』, 平成10年度版, 小樽商科大学言語センター) 参照。
3. 朝鮮朝世宗25年(1446年), ハングル公布文書名。
創製の動機, 制字原理, 字母とその名称・音価, 音節文字に綴るための規則, 字母の配列順等が記されている。
4. 現在この字母は使用されていない。
5. 崔 鉉培, 한글 가로글씨 독본 (ハングル横書き読本), 1963, 正音社, ソウル, 206ページ。
ハングルは音節単位で綴るように作られているため字母のみを横に並べて書くとかなり見づらい。そのため崔 鉉培先生は独特の字形を考案され, この書をその教本として出版された。筆者は先生のお考えだけを借り, 字形は本来のものを使用する。
6. “해형” (hɛ-hyɔŋ) なる名称は筆者の独創ではない。韓国語には待遇表現(話階)があり, 聞き手との上下もしくは親疎の関係によって待遇を5段階に分けた語尾を使うが, その内の一つに해체 (hɛtʃe) がある。“해형” (hɛ-hyɔŋ) は, この名称のから-체 (tʃe/体) を取り-형 (hyɔŋ/形) をつけたに過ぎない。
7. 「動詞語幹に-어いう語尾を付けた形(完了接続形)」
梅田博之・金東俊共著『スタンダードハングル講座』1, 大修館書店, 1989, 79ページ。
本書における過去形の説明: 「1. 用言の過去形 過去は語幹と語尾の間に-았(-ass-) という接辞を入れて表す。」(同書95ページ)
8. 「連用-아, -어, -여」塚本 勲・奥田一広共著『新しい朝鮮語』1989, 株式会社白帝社, 63ページ。
本書における過去形の説明: 「-았(-ass-) 過去を表す語幹末母音が아・오(陽母音)のとき使う。-였(-æss-) 過去を表す。語幹末母音が아・오以外(陰母音)のとき使う。
-였(-jæss-) 過去を表す。하다(動詞・形容詞)のとき使う。」同書69~70ページ。
9. 「連用形」塚本秀樹他3名著, 『グローバル朝鮮語』, くろしお出版, 1996, 110ページ。
本書における過去形の説明: 「語幹の最後の母音→(陽母音) 았(-ass-) 습나다 (-sibnida)。(陰母音)→-였(-æss-) 습나다 (-sibnida)。하다→-였(-jæss-) 습나다 (-sibnida)。(同書93ページ)

10. 「第三活用形」河野六郎著作集 第1巻, 35 ページ, 平凡社, 1979。
11. 「第一副詞形」우리말본 (国語文典) 第4版, 崔鉉培, 正音社, ソウル, 1965, 271 ページ。
12. Seoul National University Language Research Institute, KOREAN 1, Pungnam Publishing Co., Seoul, 1997, p.76.

原文：-았-/-았-/-였-are elements that indicate the past tense of the verb.

These past tense markers are usually inserted between the verb stem and the ending. -았- is inserted after -아 and -오, -였- comes after 하-, and -았- comes after the other vowels.